View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Saga University Institutional Repository

言語教育研究におけるライフストーリー研究覚書

中山亜紀子[1]

Notes for Life Story as a Qualitative Research Method in Language Education.

Akiko NAKAYAMA[1]

要　旨

日本語教育の中でライフストーリーと呼ばれるものは、応用言語学や第二言語教育ではナラティブ・インクワイアリーと呼ばれている。日本語教育の中でも、ライフストーリー研究が盛んになりつつあり、研究方法の一層の進化が求められる。本稿では、ナラティブ・インクワイアリーをめぐるいくつかの論点を紹介し、日本語教育におけるライフストーリーの資としたい。

【キーワード】質的研究、ライフストーリー、日本語教育、ナラティブ・インクワイアリー

１．はじめに

言語教育学、応用言語学が、実験室で作られた理論ではなく、学習者や実践家の声を聴き始めたのは、遠い昔ではない。このように声を聴き始めたのには、「大きな物語」が終わり、一人ひとりの物語に目が向けられるようになったこと（野口 2005）、「知」の構築と権力の関係が多くの研究者に自覚されるようになったこと（フーコー 1975、サイード 1986）、多くの人々が移動する時代になったことによって、今までの言語教育理論の枠外の現象が現れてきたこと（青木 2016）など、さまざまな原因があると考えられる。

日本語教育の中で、ライフストーリーは、学習者、あるいは教師からの世界を理解する質的研究方法の一つとして使われ、語り手個人と社会との弁証法的関係を見ることができるところに特徴があるという（Sparkes&Smith 2014）。今後、他の質的研究との関係づけ、評価方法など、方法論の発展が望まれるところである。本稿では、近年特に注目されている応用言語学、第二言語教育研究の中におけるライフストーリー研究の動向を紹介するとともに、筆者の考えるライフストーリーの特徴を明らかにしたい。

[1] 全学教育機構

2．ナラティブ・インクワイアリー

質的研究というと、一般的には、数字によるデータよりも言葉によるデータを重んじ、分析の際にも、数字よりも言葉による分析を行う。その目的は、人々の行動の「意味」を「理解」することと言われている（Schwandt 2001）。近年の質的研究の広がりの中で、人々の語り（Narrative）を用いた研究も拡大を続けている。応用言語学の中で Narrative を扱った研究を、Benson（2014）は次のようにまとめている（p. 155）。

1）Labov など社会言語学の研究。
2）人々が自分の人生に意味を与える方法として、ライフヒストリー、自伝、ナラティブアイデンティティなどの研究。
3）リオタールのグランドナラティブに影響を受けた文化の中の大きな物語研究。
4）Bamberg など日常的な雑談の中で構築されるアイデンティティの研究。

この分類の中に入れられている研究は、「人とはどのような存在なのか、また現実とはどのようなものなのか」を意味する存在論（ontology）、「研究者と知識の関係」を意味する認識論（epistemology）、「世界にどのように近づけるのか、また知識はどのように得られるのか」を意味する方法論（methodology）が（Sparkes&Smith 2014, p. 10）非常に多様であり、ナラティブ・インクアイアリーという用語がもはや、総称となりつつあるのではないかと思わせる。

ナラティブを使った研究といっても、その内実は、様々な意見、立場があり、どの立場に立つのかによって、問い、方法論、調査協力者との関係、調査結果の提示などが大きく変わってくる。

そこに共通するのは、人生そのものは語られるものであり、ナラティブは「知る」方法であるとともに、人生の存在論的状況であるという認識であろう（Smith&Sparkes 2009）。このような研究で、人間の知識には、二つの方法（プラグマティックモードとナラティブモード）があるといったブルーナー（1998）や、人が物語を聞くためには、自分自身の語りの領域（narrative realm）を通すしかないといった Polkinghorne（1988）などが基盤となっている。ナラティブを対象とした研究を行う者にとって、物語は、人々が語り、聞き、そして、自分が何をしたのか、自分が誰なのかを物語るものである。

Smith&Sparkes（2009）はナラティブを使った研究の中の論点をまとめ、論点の第一として、ナラティブと自己の関係という点について、自己を統一性のあるものとみるのか、また首尾一貫した自己があるのかが、議論の焦点の一つであると述べている。また、第二の点は、ナラティブがどれほど真実を表現しているのか、それともしていないのか、内面を表現しているのか、外の世界を表現しているのか、それとも構築されているのかという点についてである。三つ目は、研究者の立ち位置についてである。第一と第二の点については、別稿を用

意するとし、本稿では、日本語教育におけるライフストーリーの議論へ、大きな貢献があると考えられる、第三の点について述べる。

3．What と How

第三の論点の中での最初の違いは Narrative の、何を扱うのかについてである。Narrative を扱った研究には、「何が語られたのか」を扱うものと、「どのように語られたのか」を扱うものがある（Barkhuizen 2014、Polkinghone 1995、Smith & Sparkes 2006）。その違いは、誰に何が起こったのかなど「内容（Whats）」に注目するものと、語りや現実がどのように語られ、構築されるのか「方法（Hows）」に注目するものと言い換えることができる。

Whats	Hows
物語は×について何を教えてくれるのか。 ×はある人やグループにとってどんな意味があるのか。 ×に付与されている意味は何なのか、どのような状況の中で、何が起こっているのか。 物語の中で何が起こっているのか。 人々は何をしているのか。 どんな型の語りが語られているのか。	×は語りの中でどのように構築されているのか。 人々はどのように自己や社会的規範を達成しているのか。 どのようにして起こったのか。 どのように語りは作られてのか。 日常における実践がどのように作られているのか。
現象学的分析、内容分析、構造分析、グラウンデッドセオリー	会話分析、ディスコース分析

Smith&Sparkes（2009）から中山が作成

現在、日本語教育の中で行われているライフストーリー研究を考えると、「Hows」に注目したものと、「Whats」に注目したものがあることがわかる。Hows の代表的なものは、ライフストーリーインタビューのインタビューデータの分析を通じて、インクビュアーと研究協力者の間で、ある概念（例えばグローバル人材）などが、どのように構築されているのかを振り返るというものだろう（飯野 2010、三代 2015）。三代（2015）は、グローバル人材と目される人へのインタビューを通して、「グローバル人材」という三代の思い込みがどのように作られたのか、詳細に明らかにしている。ここで、分析の対象とされているのは、三代の「グローバル人材」像だけではない。三代と研究協力者双方が、「グローバル人材」という言説とどうかかわったのか、「グローバル人材」を体現する人物像を作り上げ、または演じることで、何が起こっていたのか。インタビューという場を分析することによって、見えてくるのは、日本社会であると、筆者は考える。三代は「結局、世を席捲しているグローバル人材とは、誰のことを言うのか」と論文を結んでいる。

前者の例としては、山口（2007）中山（2016）が挙げられよう。

4．Analysist か Storyteller か

さらに、Smith ＆ Sparkes（2006）は続けて、研究者が物語を分析し、物語に「ついて」考えるのか、物語「で」考えるのかの二つの立場（analysist と storyteller）があると述べている。この違いは、研究者の standpoint と言われる。

前者は、物語は社会的な事実であり、データとして分析されるべきだという立場である。明白な分析手法が求められる。Pavlenko（2007）は、言語習得／教育に関する研究の広がりを認めながらも、せっかくの調査結果が単なる「洗濯物リスト」になっていると主張し、手続きの明確化を求めている。Narrative は、文化的に（文化によって、好まれる筋は違う）、歴史的に（時代によって語られる筋が違う）、社会的に（ジェンダーや地位、階級などによって好まれる筋が違う）影響を受けており、特に、言語習得／教育研究の文脈においては、どの言葉で語る／書くのかが Narrative そのものに大きく影響を与える。これらは、Narrative 研究が克服するべき大きな壁だと述べ（Pavlenko 2002）、研究手法の明確化を求めている（Pavlenko 2007）。

それに対して、後者は、物語の研究者は物語の「聞き手」としての責任があると考える。ストーリーとは、ある人が、自分の体験に意味を与えたものであり、第一義的にその物語が語られた場所にいて、物語を感じ、「聴く」ことが求められると考える（Frank 2000）。分析とは、ストーリーの外にいて、そのなんらかの価値を適切な手法によって分析するものだが、後者の立場は、ストーリーの聞き手として、物語の中にとどまり、物語を通して語り手に出会い、感じ、語り手の体験を「理解する」しようとする。このように聴かれた物語は、結局「物語」として読者に提示され、読者自身もストーリーを通して感じ、考える人として、物語をいっしょに「理解」することが想定されている。後者では、分析手法ははっきりとは提示されない。

Storytellers do not call for their narratives to be analyzed; they call for other stories in which experiences are shared, commonalties discovered, and relationships built. (Frank 2000, p.355)

このように、両者の隔たりは大きいように見える。実際、上で引用した Frank（2000）は、Atkinson（1997）の批判に対して述べられたものである。

しかしながら、筆者には、analysist と storyteller という研究の立場が異なることは、「ストーリーを理解する」という研究手法の根本に関わる違いというよりは、お互いの欠点から学ぶことがあるのではないかと考える。

物語とは、人生の中のたくさんの行為／出来事の中から、物語の主題に合うように、行為を選び出し、時間の関係がわかるように並びなおして作られたものだ。インタビューで、ある人のお話しを聞いたとしても、それはその人の人生のすべてではなく、主題に合わせて話

されたものだ。また、聞き手は、自分自身の手持ちのストーリーを参照したりしながら、理解している。その過程がなければ、語られたストーリーとは「理解」されえない。これは、Pavlenko（2007）が述べた「大きな壁」にも通じるが、Narrative とはそのようなものであり、それを超えることはだれもできない。

Polkinghorne（1988）は、意味を理解する際の避けることのできない問題として、次の５つのことを挙げている。

１）意味とは、「物」ではなく、行為である。それは、つかむことも持つことも、測ることもできない。意味は、人々の意識が変われば、組み立て直されるものだ。

２）人は自分自身の「意味の領域」にだけ、直接触れることができる。なぜなら、取り出して観察できないからだ。自分のことを思い出したり、自分の意味の世界を内省したりすることを通してのみ、意味の世界に触れることができる。

３）意味の領域を研究するためには、言語データが必要だ。しかし、文脈から切り離された時、多くの意味が失われる。

４）言語データの分析には、解釈学的な理由付けが必要だ。類似性やパターンの認識が使われる。

５）意味の領域は、イメージや考えなどが複雑に結びつき、層になっている集団だ。

（p. 7 - 8）

ここで注目したいのは、２）で、自分が触れることができる意味の領域を通すことがなければ、他者の「言語データ」を理解することもできないということだ。analysist と storyteller、どちらの立場をとるにしても、この過程を経なければ、他者が語ったストーリーは、そのストーリーの「意味」が理解されることはない。つまり、いくら手順がはっきりしていたとしても「洗濯物リスト」のままなのだ。もし、ライフストーリー研究を、ある人、あるいは、あるグループの人々が、主観的にどのように体験を「意味づけているのか」を理解しようとするのならば（Pavlenko, 2007）、研究者は、自分自身をストーリーの「中」において、理解することが必要になるのである。

反対に Storyteller の立場をとる研究者たちも、まったく自分が理解したストーリーの正当性だけを主張することはできない。もとより、研究手法、研究手順をすべて明らかにすることは不可能だが、どのような人物が、どのような目的をもって、研究にあたり、その際にどのような感情を持ったのか、その過程を記述することは、研究の妥当性を担保するためにも必要だ。さらに、そのような記述は、研究手法を明らかにするとともに、「研究者」の立場を真実を明らかにする「高み」から、社会的歴史的存在としての「人」に引きずりおろす。そして、それまでの大きな絵を描くことを目指す「研究者」から見向きもされなかった対象、感情、現象を描くことを可能とする（西倉 2009）。さらに、「知」がどのように構築されたのかを明らかにし、知の使われ方を反省的に考察することも可能にする（Ellis 2007）。この

ように、研究過程に関わる研究者自身を描くことは「reflexivity」と呼ばれ、研究過程での研究者の関与を明らかにすることはもちろん、研究者自身が当事者でもあるテーマについて、研究の過程で研究者が感じたことを記述する（Ellis 2002）、研究者同士が、今まで研究対象にはされにくかった体験について自分たちの体験を記述するなど（Bochner & Ellis 1992）実験的な試みが多数行われている。

5．終わりに

英語圏を中心としたナラティブ・インクワイアリーの概観を述べ、日本のライフストーリー研究への資とすることが本稿の目的であった。筆者自身がライフストーリーを用いた研究者であり、自分の来し方を振り返れば、もっと自由に、実験的な書き方もできたのではないかという反省がある。

研究方法も時代や地域と無関係に発展しはしない。これからますます多様化していく日本語教育の世界で、従来の研究枠組みではとらえきれない体験、感情、現象をとらえるために、さらなる質的研究の発展が望まれる。

付記

本研究は佐賀大学の研修休暇中に JSPS 科研費17K02855の助成を受けたものです。

＜参考文献＞

青木直子（2016）「21世紀の言語教育：拡大する地平、ぼやける境界、新たな可能性」Journal CAJLE Vol. 171-22.

飯野令子（2010）「日本語教師のライフストーリーを語る場における経験の意味生成－語り手と聞き手の相互作用の分析から」『言語文化教育研究』 9　17-41.

サイード、エドワード（1986）『オリエンタリズム』今沢紀子訳　平凡社

中山亜紀子（2016）『日本語を話す私と自分らしさ－韓国人留学生のライフストーリー』ココ出版

西倉実季（2009）『顔にあざのある女性たち－「問題経験の語り」の社会学』生活書院

野口裕二（2005）『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房

フーコー、ミシェル（1975）『狂気の歴史』田村俶訳、新潮社

ブルーナー、ジェローム（1998）『可能世界の心理』みすず書房

三代純平（2015）「グローバル人材」になるということ－モデル・ストーリーを内面化することのジレンマ」『日本語教育学としてのライフストーリー－語りを聞き、書くということ』くろしお出版

山口悠希子（2007）「ドイツで育った日本人青年たちの日本語学習経験－海外に暮らしながら日本語を学ぶ意味」『阪大日本語研究』（19）大阪大学大学院文学研究科日本語学講座129-159.

Atkinson, P. (1997). Narrative turn or blind alley? *Qualitative Health Research, 7*, 325-344.

Barkhuizen, G., Benson, P., Chick, A. (2014) *Narrative Inquiry in Languege Teaching and Learning*

Research. London: Routledge.

Benson, P. (2014) Narrative Inquiry in Applied Linguistics Research. *Annual Review of Applied Linguistics, 34*, 154-170.

Bochner, A. and Ellis, C. (1992) Personal Narrative as a Social Approach to Interpersonal Communication. *Communication theory 2(2)* 165-172.

Ellis, C. (2007) Telling Secrets, Revealing Lives, Relational Ethics in Research With Intimate Others. *Qualitative Inquiry 13/1*, 3-29.

Ellis, C. & Berger, L. (2003) Their Story/My Story/Our Story: Including the Researcher's Experience in Interview Research. In Jaber F. Gubrium & James A. Holstein (Eds). *Postmodern Interviewing*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Frank, A. (2000) The standpoint of storyteller. *Qualitative Health Research, 10(3),* 354-365.

Pavlenko, A. (2002) Narrative Inquiry: Who's story anyway. *TESOL Quarterly 7(2)*, 213-18.

Pavlenko, A. (2007) Autobiographic Narratives as Data. *Applied Linguistics. 28(2)*, 163-188.

Polkinghorne, D. (1988) *Narrative Knowing and the Human Sciences*. NY: Suny Press.

Polkinghorne, D. (1995) Narrative configuration in qualitative analysis. In Hatch, J. and Wisniewski, R., (Eds). *Life history and narrative*. 5-24. London: Falmer Press.

Schwandt, T. A. (2001). *Dictionary of Qualitative Inquiry (2nd ed.)*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Smith, B. & Sparkes, A.C. (2006) Narrative Inquiry in psychology: Exploring the tensions within. *Qualitative Research in Psychology, 3(3),* 169-192.

Sparkes, A. C. and Smith B. (2014). *Qualitative Research Methods is Sport, Exercise and Health; from process to product*. New York, NY: Routledge.